共同研究

（二〇一六年四月一日～九月三〇日）

戦後日本文化再考

（研究代表者　坪井秀人、幹事　磯前順一）

〔共同研究者名〕

浅野麗、石川巧、岩崎稔、大原祐治、岡田秀則、辛島理人、狩俣真奈、川口隆行、北中淳子、北原恵、木村朗子、紅野謙介、高榮蘭、五味渕典嗣、斉藤綾子、佐藤泉、尹芷汐、塩野加織、島村輝、申知瑛、管野優香、鈴木勝雄、張政傑、長志珠絵、十重田裕一、鳥羽耕史、戸邉秀明、成田龍一、野上元、朴貞蘭、橋本あゆみ、福間良明、松原洋子、水川敬章、光石亜由美、美馬達哉、村上（伊波）陽子、李承俊、鷲谷花、渡辺直紀、渡邊英理、沈熙燦、郭南燕、北浦寛之、石川肇、王莞晗、栄元、増田斎、田村美由紀、杉田智美

〔海外共同研究員名〕

酒井直樹、五十嵐恵邦、キャロル・グラック

〔研究発表〕

〈第七回研究会〉

二〇一六年四月一六日

個人発表「占領期」

尹　芷汐「戦後日中間の知識人ネットワークにおける『日本文学』の意味」

番匠健一「戦後北海道における『植民』と『開拓』―高岡熊雄の戦後」

ニコラス・ランブレクト「引揚げ文学からみたバンドン十原則：安部公房の場合」

研究会ウェブサイトのデモンストレーション

二〇一六年四月一七日
パネル発表「戦後とメディア／占領期の地方雑誌」
石川　巧「戦争末期の外地における言論状況――雑誌『月刊毎日』を読む」
森岡卓司「雑誌『労農』と森英介―地方文化運動の行方」
天野知幸「GHQ占領下の引揚雑誌における〈越境〉の記録と記憶――雑誌『みなと』を中心に」
ディスカッサント　大原祐治
全体討論
〈第八回研究会〉
二〇一六年六月一八日
山本昭宏　論題：酒井直樹「レイシズム・スタディーズへの視座」を読む
小田龍哉　論題：酒井直樹「トランス・パシフィック・スタディと米日の共犯」論評
全体討議
二〇一六年六月一九日
基調講演
酒井直樹「戦後日本社会と人種主義」
ディスカッション
ディスカッサント　磯前順一、坪井秀人
全体討議
〈第九回研究会〉
二〇一六年八月二〇日
「記録をつなぐ、記憶でつなぐ――福島県富岡町の試み」
五味渕典嗣「コーディネーターによる趣旨説明」
報告　三瓶秀文、門馬健
コメント　木村朗子、高榮蘭
総合討議
二〇一六年八月二一日
「帝国と民族のはざまで――日本敗戦後の朝鮮人・台湾人とその政治・文化運動」
渡辺直紀　パネル趣旨説明
申　知瑛「徴用朝鮮人・台湾人の『戦後』とインドネシア」
渡辺直紀「『北の詩人』再読――林和と朝鮮文学」
廣瀬陽一「日本論・日本人論の流行と金達寿『日本の中の朝鮮文化』」
コメント　波田野節子、金友子
総合討議

浪花節の生成と展開についての学際的研究

（研究代表者　真鍋昌賢、幹事　細川周平）

〔共同研究者名〕

芦川淳平、上田学、北川純子、薦田治子、諏訪淳一郎、時田アリソン、馬場美佳、兵藤裕己、細田明宏、森谷裕美子、早稲田みな子、渡瀬淳子、延宏真治、古川綾子

〔海外共同研究員名〕

瀬戸智子、朴英山

〔研究発表〕

二〇一六年五月二八日

〈第一回研究会〉

真鍋昌賢「共同研究会の主旨と森川コレクションの概要について」

細田明宏「語り芸あるいは寄席芸としての浪花節―浄瑠璃、講談、浪花節の『壺坂霊験記』から」

二〇一六年五月二九日

今後の予定についての相談

〈第二回研究会〉

二〇一六年八月二九日

日文研所蔵浪曲レコードの見学

早稲田みな子「ハワイ・カリフォルニアの日系社会と浪花節」

二〇一六年八月三〇日

芦川淳平「ホワイトハウスの浪曲師―奈良丸北米紀行の足跡―」

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月二二日

北川純子「明治～大正期の『女流』浪花節語り」

時田アリソン「浪花節の口頭性：『左甚五郎』シリーズを中心に」

二〇一六年九月二三日

薦田治子「浪花節と薩摩琵琶の音楽構造比較試論」

戦争と鎮魂

（研究代表者　牛村　圭、幹事　ジョン・ブリーン）

〔共同研究者名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、栗原俊雄、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、谷口幸代、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、竹ノ内（吉井）文美、吉田（古川）優貴、末木文美士、堀ま

どか、朴美貞、平松隆円、今泉宜子、稲賀繁美、倉本一宏、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕、西田彰一、南直子

〔海外共同研究員名〕

徐載坤、ケビン・ドーク、エヤル・ベンアリ、金志映

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年八月一三日

牛村　圭「三年目の共同研究会展望など」

西田彰一「筧克彦の思想とその影響について」

栗原俊雄「『戦後補償裁判』（ＮＨＫ出版新書、二〇一六年六月）を読む」

発話　牛村　圭

全員討論

〈国際共同研究会〉

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国領域内文化の再検討

（研究代表者　劉　建輝、幹事　北浦寛之）

〔共同研究者名〕

安藤潤一郎、井村哲郎、岡本貴久子、上垣外憲一、岸陽子、小林茂、小林善帆、呉孟晋、白幡洋三郎、姜克実、鈴木貞美、戦暁梅、単援朝、塚瀬進、鳥谷まゆみ、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸偉、仲万美子、井上章一、稲賀繁美、伊東貴之、松田利彦、森洋久、陳其松、石川肇

〔海外共同研究員名〕

王中忱、孫江、徐興慶

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一六年八月五日

松宮貴之「中国の政治家と書の分析―洋務派から変法派まで」

鄭　在貞「帝国日本の植民地支配と朝鮮鉄道」

二〇一六年八月六日

仲万美子「モダン都市の娯楽空間への誘い仕掛けについて：大連を映し出す画像資料からの読み解きを通して」

説話文学と歴史史料の間に

（研究代表者　倉本一宏、幹事　榎本　渉）

〔共同研究者名〕

東真江、石川久美子、上野勝之、内田澪子、大橋直義、尾崎勇、追塩千尋、加藤友康、川上知里、木下華子、小峯和明、佐野愛子、佐藤信、関幸彦、五月女肇志、曾根正人、多田伊織、蔦尾和宏、中村康夫、野上潤一、野本東生、樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、松薗斉、三舟隆之、山下克明、横田隆志、白雲飛、荒木浩、井上章一、呉座勇一、中町美香子、谷口雄太、龔婷

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋浣範、劉暁峰、魯成煥、グエン・ヴー・クイン・ニュー

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年六月四日

追塩千尋「武内宿禰伝承の展開〜『古今著聞集』武内宿禰説話の意義とその背景〜」

古橋信孝「大和物語の歴史と文学」

二〇一六年六月五日

井上章一「百合若大臣の読み説き」

論集打ち合わせ

〈第二回研究会〉

二〇一六年七月九日

三舟隆之「・『東大寺諷誦文稿』・『日本霊異記』・『日本感霊録』の成立とその性格」

多田伊織「言葉と信仰 『日本霊異記』周辺の言語環境」

二〇一六年七月一〇日

龔　婷「京洛の境界線—文学・古記録における平安京の『内と外』の認識変化について」

倉本一宏「『コノ話ハ蓋シ小右記ニ出シナラン』考」

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月一〇日

東　真江「説話と考古学」

仁藤敦史「『日本霊異記』にみる他界観—黄泉の国から地獄への転換—」

二〇一六年九月一一日

（鼎談「『日文研問題』をめぐって」）

加藤友康「古事談の情報源—古記録が筆録した情報と『言談』への変容の検討を通して考える—」

グエン・ティ・オワイン「日本とベトナムの説話における歴史人物のイメージをめぐって—『日本霊異記』と

『今昔物語集』を中心に」

3・11以後のディスクール／『日本文化』

〈研究代表者　ミツヨ・ワダ・マルシアーノ、幹事　坪井秀人〉

〔共同研究者名〕

石田美紀、久保豊、谷川建司、木村朗子、川口隆行、クリスティーナ・岩田ワイケナント、清水晶子、高橋準、菅野優香、出口康夫、水谷雅彦、一ノ瀬正樹、近森高明、西村大志、松浦雄介、アンニャ・ホップ、安本真也、須藤遙子、馬然、木下千花、大塚英志、北浦寛之、長門洋平

〔海外共同研究員名〕

王向華、金普慶

〔研究発表〕

二〇一六年九月二四日

自己紹介＋研究発表計画報告

二〇一六年九月二五日

自己紹介＋研究発表計画報告続き

久保　豊「二人の息子、二人の母」

石田実紀「マンガ・アニメにおける原発事故と放射性物質の表象―『Coppelion』と『美味しんぼ』を中心に」

日本の舞台芸術における身体　―死と生、人形と人工体

〈研究代表者　ボナベントゥーラ・ルペルティ、幹事　細川周平〉

〔共同研究者名〕

赤間亮、板谷徹、井上理恵、岩井眞實、梅山いつき、カティア・チェントンツェ、菊地浩平、桜井圭介、佐藤恵里、武井協三、竹本幹夫、土田牧子、中嶋謙昌、深澤昌夫、藤井慎太郎、森下隆、山田和人、滝澤修身、橋本裕之、李応寿

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一六年五月二一日

滝澤修身「宣教師の見た日本の古典芸能」

岩井眞實「歌舞伎の場面転換の方法について」

井上理恵「川上音二郎と貞奴の身体表現」

ボナベントゥーラ・ルペルティ「舞踊の身体について」

オープンディスカッション

〈第六回研究会〉

二〇一六年七月一六日

梅山いつき「平田オリザの俳優論―ロボット演劇プロジェ

クトを中心に」
カティア・チェントンツェ「土方巽の肉体論―死体から出発すること」
森下　隆「肉体の叛乱から衰弱体へ―土方舞踏の転換期」
桜井圭介「小劇場演劇とコンテンポラリー・ダンスにみる日本的（？）現在形（？）の身体」
オープンディスカッション

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想―王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼―

（研究代表者　伊東貴之、幹事　倉本一宏）

〔共同研究者名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、橘川智昭、権純哲、小島毅、関智英、末木文美士、銭国紅、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、土田健次郎、永冨青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、吾妻重二、新田元規、石井剛、伊藤聡、井ノ口哲也、内山直樹、遠藤基郎、大久保良峻、苅部直、黒岩高、岸本美緒、児島恭子、近藤成一、佐々木愛、杉山清彦、高柳信夫、葭森健介、保立道久、李暁東、本間次彦、松野敏之、石川洋、澤井啓一、渡邊義浩、前田勉、渡辺美季、平野千果子、中純夫、古勝隆一、茂木敏夫、井上章一、瀧井一博、ジョン・ブリーン、松田利彦、劉建輝、榎本渉、フレデリック・クレインス、マルクス・リュッターマン、佐野真由子、山村奨

〔海外共同研究員名〕

張啓雄、葛兆光、手島崇裕、ベンジャミン・A・エルマン

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉
二〇一六年五月二八日
伊東貴之「共同研究の趣旨説明」

〈第二回研究会〉
二〇一六年七月二三日
伊東貴之「伝統中国をどう捉えるか？―伝統中国の国家・社会論のための一考察」
井ノ口哲也「班固『両都賦』と張衡『二京賦』―後漢知識人の洛陽（雒邑）観　初探―」
小島　毅「周公はなぜ偉大なのか―経学に見る儒教の王権理論―」

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月二四日
関　智英「『東洋＝王道』『西洋＝覇道』の起源―王正廷・殷汝耕・孫文」
古勝隆一「衰世の皇帝菩薩―南朝陳における王権と仏教」
内山直樹「逐鹿と王命―前漢期王権論の展開」

万国博覧会と人間の歴史

〈研究代表者　佐野真由子、幹事　井上章一〉
〔共同研究者名〕
石川敦子、市川文彦、岩田泰、鵜飼敦子、江原規由、神田孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、増山一成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、橋爪紳也、林洋子、稲賀繁美、瀧井一博、劉建輝
〔海外共同研究員名〕
青木信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、徐蘇斌
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一六年五月一四日
井上　潤【書評と展望①】
坂口　康【書評と展望②】
二〇一六年五月一五日
増山一成「今後の研究展望――一九四〇年日本万博をめぐる人・モノ・社会」
次期論集計画について、相談、全員討論
〈第二回研究会〉
二〇一六年七月三〇日
沓名貴彦【書評と展望③】
木下直之【書評と展望④】
二〇一六年七月三一日
神田孝治「今後の研究展望―博覧会とツーリズム」
次期論集に向けて、全員討論

多文化間交渉における「あいだ」の研究

〈研究代表者　稲賀繁美、幹事　榎本　渉〉
〔共同研究者名〕
新井菜穂子、鵜戸聡、江口久美、大西宏志、岡本光博、小川さやか、隠岐さや香、小倉紀蔵、金子務、鞍田崇、クリストフ・マルケ、近藤高弘、申昌浩、鈴木洋仁、全美星、荘千慧、滝澤修身、武内恵美子、竹村民郎、多田伊織、千

葉慶、テレングト・アイトル、戸矢理衣奈、中村和恵、西原大輔、二村淳子、朴美貞、橋本順光、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、ヘレナ・チャプコヴァー、堀まどか、松嶋健、三原芳秋、マシュー・ラーキン、山本麻友美、今泉宜子、木村直恵、林洋子、郭南燕、フレデリック・クレインス、森洋久、宮崎康子、李応寿、石川肇、杉田智美、デイビット・W・ジョンソン、セシル・ラリ、長門洋平、九里文子、李ユンヒ、春藤献一、片岡真伊

〔海外共同研究員名〕

デンニッツァ・ガブラコヴァ、近藤貴子、ミツヨ・デルクール・イトナガ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年四月二七日

稲賀繁美　主旨説明

鈴木洋仁「ネット時代の日本的海賊―2ちゃんねるからニコニコ動画まで」

多田伊織　コメンテイター

江口久美「海賊党の液体民主主義について」

宮崎康子「開かれた経済と海賊行為」

橋本順光「海賊、海賊行為と蛸―触手の怪物から八面六臂のエイリアンへ？」

二〇一六年四月二八日

フレデリック・クレインス「略奪品か戦利品か―一六一五年のサント・アントニオ号拿捕事件と幕府の対応」

小川さやか「〈借り〉をまわすシステム―タンザニアにおける携帯を通じた送金システムを事例に」

片岡真伊「マンガ翻訳の海賊たち―スキャンレーションにおける航海術をめぐって―」

鞍田　崇「つくることのゆくえ」

範　麗雅「中国人外交官と一九三五年の『ロンドンにおける中国芸術国際展覧会』：提案から実現まで」

近藤貴子「アヴァンギャルディストとしての自己定位の探究―工藤哲巳の海賊的考察」

榎本　渉「悪石島の寄船大明神とその周辺」

ディスカッション

パトリック・フローレス＋稲賀繁美

ミカエル・リュケン＋稲賀繁美

タイモン・スクリーチ＋稲賀繁美

カフェスタイルフリーディスカッション「『海賊史観』関

係研究成果の報告と自由討論」
金杭＋ペドロ・エルベール＋三原芳秋「海賊史観による戦後民主主義再考」
〈第二回研究会〉
二〇一六年五月二八日
稲賀繁美「日本美学における《あいだ》概念についての考察」
総合討論
二〇一六年五月二九日
「あいだ」研究会の運営に関する自由討論・計画立案
「うつし」と「うつわ」プロジェクトに関する説明と自由討論・計画立案
〈第三回研究会〉
二〇一六年七月三日
（所外開催）
多摩美術大学美術館B1多目的室
「鈴木大拙と松ヶ岡文庫」展見学
末木文美士「鈴木大拙の思想」
冨澤かな「『精神性＝霊性』spirituality をめぐる東西の〈あいだ〉」

二〇一六年七月四日
李應壽「村山知義の『故郷物語』と転向」
討論
〈第四回研究会〉
二〇一六年七月三一日
稲賀繁美「左右の問題・渦巻きの疑問」
カフェセッション―自由討論
黒田玲子「右と左―キラリティーを巡って：物理学から生物学へ」
質疑応答
二〇一六年八月一日
金子　努「渦巻きと螺旋についての科学史的・理論的基礎」
質疑応答
〈第五回研究会〉
二〇一六年八月二九日
稲賀繁美「『中動態』をめぐる問題構成」
森田亜紀「中動態とその射程」
三木順子「存在と現象の『あいだ』―H・G・ガーダマーの Übergang（移行）概念を手掛かりに」
多田伊織「Sanskrit の動詞活用における Voice（態）

Ātmanepada (Middle or Reflexive) について」
二〇一六年八月三〇日
アグネシカ・コズィラ「西田幾多郎の芸術論における《あいだ》」
総合討論「中動態」と対人性—責任概念にむけて
〈第六回研究会〉
二〇一六年九月二六日
山崎佳代子「『ラウンド・テーブル』の起源」
申　昌浩「国境を越える歌曲　変貌するメッセージ」
二〇一六年九月二七日
地域文化代表と国際性：美術史学の現状を中心に
稲賀繁美「北京国際美術史学会参加者による報告＋総合討議」

差別から見た日本宗教史再考

（研究代表者　磯前順一、幹事　北浦寛之）
〔共同研究者名〕
吉村智博、佐藤弘夫、鈴木岩弓、小倉慈司、片岡耕平、鈴木英生、小田龍哉、川村覚文、山本昭宏、青野正明、沈熙燦、高柳健太郎、田辺明生、苅田真司、舩田淳一、太田恭治、浅居明彦、水内勇太、鍾以江、島薗進、佐々田悠、寺戸淳子、金沢豊、西宮秀紀、舟橋健太、幡鎌一弘、鶴見晃、河井信吉、上村静、安部智海、竹本了悟、パトリシア・フィスター、マルクス・リュッターマン
〔海外共同研究員名〕
シュタイネック・智恵、シュタイネック・ラジ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
磯前順一　イントロダクション
参加者自己紹介
小田龍哉「喜安朗による網野論の検討」
用語集企画説明
〈第二回研究会〉
二〇一六年七月九日
磯前順一　イントロダクション
磯前順一「公共宗教論の現在——『宗教概念』論から『他者のまなざし』論へ」
吉村智博「身分制研究史と賤民身分の具体像」
全体討議

〈国際共同研究〉

植民地帝国日本における知と権力

（研究代表者　松田利彦、幹事　瀧井一博）

〔共同研究者名〕

飯島渉、岡崎まゆみ、小野容照、加藤聖文、加藤道也、河原林直人、川瀬貴也、栗原純、愼蒼健、通堂あゆみ、アルノ・ナンタ、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、長沢一恵、李昇燁、中生勝美、山本浄邦（邦彦）、稲賀繁美、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

陳姃湲、李炯植、洪宗郁

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年四月一六日

松田利彦「最終年度を迎えるにあたって」

都留俊太郎「移入官僚と台湾警察の変容―内海忠司警察部長期の台北州警察を中心に」

陳　姃湲「植民地の優生学―一九三〇年代台湾の精神病問題を手がかりに」

洪　宗郁「マルクス主義歴史学者・金洸鎮の生涯と学問」

韓国翰林大学校との共催シンポについての打ち合わせ

〈第二回研究会〉

二〇一六年六月三〇日

松田利彦「植民地朝鮮における公衆衛生学のある系譜」

ムン・ミョンギ「植民地台湾の医療：統計と比較を中心に」

イ・スンイル「朝鮮総督府の植民地法制―民法を中心に」

チョ・ジョンウ「国家と市場の交錯：京城帝大商法研究のディレンマ」

長沢一恵「近代鉱業と植民地朝鮮社会―李鍾萬の大同鉱業と雑誌『鉱業朝鮮』を中心に」

ラウンドテーブル討論

二〇一六年七月一日

やまだあつし「鹿児島高等農林学校からみた台湾・沖縄・朝鮮」

春山明哲「日本における台湾史研究の一考察―戴國煇と「知」の精神史の視点から―」

顔　杏如「伝統と近代の交錯：『台湾歳時記』における植物の知識」

小林善帆「帝国支配といけ花―植民地朝鮮・台湾の女学校・高等女学校における相互参照を中心に」

総合討論

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月一一日

山本浄邦「尹雄烈と光州実業学校」

宮川卓也「『朝鮮民暦』に見る伝統知の近代的再編」

李　炯植「朝鮮近代史料研究会と戦後朝鮮近代史研究」

加藤道也「植民地官僚の統治認識―知と権力の観点から―」

李　昇燁「植民地統治と在野の知：『文化政治』期における細井肇の活動」

本間千景「一九三〇年代朝鮮における農村振興運動と八尋生男」

岡崎まゆみ「京城帝国大学の私法学」

明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―

（研究代表者　瀧井一博、幹事　牛村　圭）

〔共同研究者名〕

五百旗頭薫、岩谷十郎、植村和秀、大川真、小川原正道、勝部眞人、國分典子、塩出浩之、島田幸典、清水唯一朗、谷川穣、永井史男、長尾龍一、中村尚史、福岡万里子、前田勉、松田宏一郎、山田央子、岡本貴久子、浅見雅男、上野景文、今野元、小林道彦、内藤一成、奈良岡聰智、楊際開、柗居宏枝、松沢裕作、三谷博、大久保健晴、加藤雄三、林洋子、ジョン・ブリーン、佐野真由子、龔穎、石上阿希、古川綾子

〔海外共同研究員名〕

ハラルド・フース、アリステア・スウェール

〔研究発表〕

〈第七回研究会〉

二〇一六年四月一五日

石上阿希「春画を拒絶する、春画を見直す―明治から現代まで」

大石　眞「明治憲法史研究の歩みと課題」

二〇一六年四月一六日

今野　元「上杉慎吉とドイツ政治―吉野作造との対抗関係に於いて」

龔　穎「漢詩のわかれ―ベルリン時代の井上哲次郎とその詩友たち」

〈第八回研究会〉

二〇一六年六月三日

古川綾子「明治の関西演芸界にみる遊芸稼人と政治家の

ボーダーライン」
五百旗頭薫「明治日本の政治・文芸・歴史認識」
二〇一六年六月四日
浅見雅男「明治の皇族　永世皇族制の変遷」
楊　際開「吉田松陰の革命思想とその天下観―東アジアにおける『鎖国』と『開国』という視点から」
〈第九回研究会〉
二〇一六年七月二九日
西田彰一「『皇学会雑誌　神ながら』における明治維新論の展開―一九三〇年代の筧克彦の思想と活動―」
平川祐弘「同時代を生きた内外の政治家の歴史観の比較はいかにして可能か」
二〇一六年七月三〇日
末木文美士「国体と仏教」
小林道彦「近代日本の転換点―日露戦争と国内政治」
〈第一〇回研究会〉
二〇一六年九月九日
（所外開催　吉野作造記念館）
「吉野作造と明治文化研究」
（吉野作造二〇一三年度前期企画展「明治文化研究の奇人変人たち―吉野作造・尾佐竹猛・宮武外骨―」の概要説明、吉野作造記念館学芸員）
三谷　博「世界文脈における明治維新」
二〇一六年九月一〇日
谷川　穣「佐田介石について」
勝部真人「近代日本の農村経済組織化と村落―発展類型論の視角から―」
二〇一六年九月一一日
登米明治村見学
ガイド：登米明治村学芸員

マンガ・アニメで日本研究

（研究代表者　山田奨治、幹事　荒木　浩）
〔共同研究者名〕
飯倉義之、石田佐恵子、伊藤遊、岡本健、金水敏、高馬京子、谷川建司、西村大志、山中千恵、山本冴里、横濱雄二、安井眞奈美、北浦寛之、宮崎康子、小泉友則
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一六年七月三〇日

横濱雄二　作品検討『孤独のグルメ』
出版打合せ

日本語の起源はどのように論じられてきたか―日本言語学史の光と影

〔研究代表者　長田俊樹、幹事　井上章一〕
〔共同研究者名〕
斎藤成也、安田敏朗、狩俣繁久、千田俊太郎、風間伸次郎、永澤済、児玉望、菊澤律子、林範彦、アンナ・ブガエワ、福井玲、伊藤英人、鈴木貞美、マーク・ハドソン、平子達也、杉山豊
〔海外共同研究員名〕
トマ・ペレール、ジョン・ホイットマン、アレキサンダー・ヴォヴィン
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一六年四月二三日
安田敏朗「上田万年『日本語の本源』をめぐって」
二〇一六年四月二四日
井上章一「明治時代の日本語起源論―アーリヤ起源説をめぐって」
斎藤成也「DNAからさぐる日本列島人」
〈第二回研究会〉
二〇一六年六月一八日
長田俊樹「はたして上田万年はどこまで西洋言語学を理解していたのか」
鈴木貞美「日本近代の言文一致神話―言語学と国語学の問題をめぐって」
二〇一六年六月一九日
風間伸次郎「言語類型論から見た日本語―松本克己『環日本海仮説』の検討等を中心に―」
平子達也「日本祖語について」再読
〈第三回研究会〉
二〇一六年八月三〇日
長田俊樹「明治期の日本語系統論―日本の言葉はアリアン言葉なり」
松森晶子「琉球祖語アクセント再建に向けて―今、何を記述し、残しておくべきか」
五十嵐陽介「琉球語を排除した『日本語』という単系統群は果たして成立するのか」

コメント　上野善道
二〇一六年八月三一日
児玉　望「核はなくなるのか～祖語アクセント再建仮説が説明してきたこととしなかったこと～」
狩俣繁久「日琉祖語はどのように語られてきたか」
トマ・ペレール「琉球諸語の下位分類」
コメント＋ディスカッション　上野善道
〈第四回研究会〉
二〇一六年九月一七日
長田俊樹「戦後の日本語系統論―安田徳太郎のレプチャ語起源説を中心に」
福井　玲「金沢庄三郎による日本語と韓国語の比較研究」
安田敏朗「小倉進平の朝鮮語研究」
二〇一六年九月一八日
伊藤英人「古代朝鮮半島諸言語に関する河野六郎説の整理」
杉山　豊「アクセント史資料としての伝統声楽――朝鮮語の場合――」

投企する古典性―視覚／大衆／現代

〈研究代表者　荒木　浩、幹事　稲賀繁美〉
〔共同研究者名〕
飯倉洋一、伊藤慎吾、上野友愛、岡田圭介、河東仁、恋田知子、河野貴美子、河野至恩、合山林太郎、齋藤真麻理、竹村信治、中野貴文、中前正志、野網摩利子、三戸信惠、箕浦尚美、山本陽子、渡部泰明、渡辺麻里子、マラル・アンダソヴァ、石上阿希、呉座勇一、李愛淑、土田耕督、徳永誓子、漆崎まり、ゴウランガ・チャラン・プラダン、チャン・ティ・チュン・トアン、ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ
〔海外共同研究員名〕
楊暁捷、山藤夏郎、李愛淑
〔研究発表〕
二〇一六年五月一四日
李　愛淑「古典の翻訳―大衆性と視覚性を問う」
二〇一六年五月一五日
荒木　浩「投企する古典性―Projecting Classicism なるプロジェクトをめぐって」
〈第二回研究会〉

二〇一六年七月二三日
ゴウランガ・チャラン・プラダン「外国における『方丈記』の受容――夏目漱石の『英訳方丈記』をめぐって――」
マラル・アンダソヴァ「カザフスタンにおける日本神話の受容――現状と課題」
今後の予定　大衆文化キックオフシンポなど
山藤夏郎「〈古典性〉再考――台湾の『國文』教育を参照事例として――」
二〇一六年七月二四日
伊藤慎吾「ライトノベルと怪談資料」
（文責：研究協力課）

基礎領域研究

韓国語運用の応用（継続）
代表者　松田利彦
概　要　研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

古記録学基礎研究（継続）
代表者　倉本一宏
概　要　日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。大学院生・教職員・他大学の院生・研究者の参加も歓迎する。

フランス語基礎運用（初級）（継続）
代表者　稲賀繁美
概　要　初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。教科書としては当該年度のＮＨＫラジオ講座教材の準備を参加者各自にお願いする。他の教材は現場で提供する。

フランス語読解補助・論文作成指南（中級）（継続）
代表者　稲賀繁美
概　要　中級以上の実務能力開発、論文作製の手ほどきをする。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

中世文学講読（継続）
代表者　荒木　浩
概　要　中世文学の影印本の読解を軸に、古典テクストの研究方法を考察する。